



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国における日本語主専攻学習者の出身地と動機減退の関連
Author(s)	許, 晴
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 26, 73-90
Issue Date	2018-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68743
Type	departmental bulletin paper
File Information	73-90_Xu.pdf



中国における 日本語主専攻学習者の 出身地と動機減退の関連

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

許 晴

許
晴
XU Qing

Research on Relationship between Birthplace and Demotivation Factors of Japanese Language Learners in China

XU Qing

abstract

With Japanese language learners in China as research participants, this paper adopts quantitative and qualitative methods to explore the relationship between the learners' birthplace and factors related to their demotivation to study the Japanese language. From an interview of nine students majoring in Japanese, this paper suggests that one of the demotivation factors may stem from senses of inferiority or superiority associated with their birthplaces. Additionally, a survey on learning demotivation was conducted in two universities, one in Hunan Province and another in Shanghai City. Comparisons of learners' demotivation factors based on home province and location of family register indicated significant differences. That is, place of birth more strongly affected demotivation of learners from the university located in Shanghai than the university located in Hunan. Place of home province exerted a greater impact on demotivation than did location of family register for students from the university located in Shanghai. Meanwhile, urban-rural difference had a closer relation to demotivation for students from the university located in Hunan.

1 研究背景

中国における日本語学習者数は2009年の827,171名から2012年には1,046,490名になり、26.5%増加した。韓国を上回り、第1位になったことになる（国際交流基金2013）。しかし、2015年、中国において、初等教育における英語導入・強化が進み、また中等教育においても外国語科目として英語を選択する機関が増加している中で、日本語専攻の学科・学生数が減り、全体の日本語学習者数は953,283名に減少した（国際交流基金2017）。近年、中国の日本語教育は外国語教育環境に影響され、社会的に日本語教育に対する関心が薄くなってきたと言える。

教育現場においても、学習者が日本語学習に対する動機減退の傾向が見られている。蔣（2010）^①は、日本語専攻学習者の動機づけの強度は学年の上昇につれて下がり、課外学習時間も少なくなることを明らかにした。調査対象となった268名の日本語専攻学習者においては、動機づけ強度の5段階評価の平均値（M）と標準偏差（SD）は、1年生はM=3.92、SD=0.65、2年生はM=3.65、SD=0.59、3年生はM=3.42、SD=0.54、4年生はM=3.35、SD=0.53であったという。また、張（2014）は上海市の6大学で質問紙調査を行い、学習者の日本語学習に対する積極性が足りないという現状を指摘した。

▶1 本研究における中国語文献に関しては、論文本体と参考文献の表記は中国語表記に統一した。

2 動機減退の定義と先行研究

動機づけは、学習者の学習に関わる重要な要素の一つとして、様々な議論や研究がされてきた。鹿毛（2013）によると、動機づけとは「行為が起こり、活性化され、維持され、方向づけられ、集結する現象」である。つまり、行動を生起させ、方向づけるために機能する生命体のパワーを説明する概念が動機づけであり、それは、エネルギー性と指向性という二つの観点から理解することが可能だと述べている。従来の動機づけの研究では、学習の理由や目的の種類を論じられることが多かった（磯田2005）。つまり、動機づけの指向性、内容が論じられている。例えば、日本語教育では、動機づけの内容的分類を行った研究（縫部・狩野・伊藤1995、郭・大北2001、毛・福田2010）、動機づけを一つの変数にし、目標構造、成績、文化背景、継続ストラテジーなど他の要因との関連を調べる研究（倉八1992、大西2011、楊2011）がある。エネルギー性とは動機づけの「量的側面」であり、行為の頻度や強さ、持続時間など、その「大小」や「強弱」といった量的な問題に還元できる側面を指す（鹿毛2013）。

中国の日本語教育は、社会的にも教育現場にも動機のエネルギー性である

- 2 Dörnyei (2005) は英語版であり、「Dörnyei, Z. (2001) *Teaching and researching Motivation*. New York: Longman.」を中国で出版されたものである。

「量的側面」に問題が見られ、この「強弱」の変化を示す動機減退は学習者の教室でのパフォーマンスや言語学習の成功に影響がある (Hamada & Grafström 2014)。そのため、本研究では、動機づけのエネルギー性に注目し、動機減退に焦点を当てたいと考えている。動機減退とは「外的要因と内的要因の両方の働きによって、行動の意図と進行中の行動に対して、動機づけが削減されることである」(阿川・植田2013、荒井2004)。

動機減退の研究に関しても、動機づけの研究で見たのと同様に、動機減退要因の構造にのみ注目した研究や、動機減退要因と言語習熟度など他の要因との関連を探る研究が見られる。先行研究では、国別、地域別、文化圏別に研究されてきたため、世界中の国や地域による動機減退要因研究の比較が可能である。以下、それぞれについて概観する。

まず、動機減退要因に注目した研究を概観する。はじめに、西洋文化圏の学習者を対象とした研究として、ハンガリーとオーストラリアの研究を挙げる。Dörnyei (2005)⁽²⁾ は、英語とドイツ語を学習しているハンガリーの高校生へのインタビューから、9つの動機減退要因を挙げた。それぞれは、教師、学校の不十分な設備、自信の喪失、第二言語に対する消極的態度、強制的な第二言語の学習、学習している他の言語の干渉、第二言語コミュニティに対する消極的な態度、グループ構成員の態度、教材と教科書である。日本語学習者を対象とした研究としては、Hamada & Grafström (2014) がある。彼女らはオーストラリアで日本語を学習している中上級と上級の学習者6名へインタビューした結果、学習環境 (クラスメート、日本語の低優先性)、学習内容 (漢字の難しさ、ライティング、読解)、心理的要因 (試験、自信の喪失、プレッシャー)、教師と授業 (教師、授業のスタイル)、その他 (将来の実用性、興味の喪失) という5カテゴリーを提示した。

中東の英語学習者を対象とした研究には、イランの高校生と大学生を対象とした者がある。Meshkat & Hassani (2012) では、イランの高校生英語学習者を対象に、動機減退要因について調査を行った結果、学校の設備の不足、文法の重視、教室で文法的に正確な英語使用期待が強い動機減退要因となっていることがわかった。学習の内容と教師の能力、教え方も動機減退と関連のある要因である。さらに、Ghadirzadeh, Hashtroudi & Shokri (2012) はイランの大学生英語学習者260名に質問紙調査を行い、学習能力の欠如、内発的動機づけの欠如、教師の不適切な教え方とコースのコンテンツ、大学設備の不足、困難な文法問題に重点を置くという5つの要因が抽出された。動機の高い群と低い群の間には、学習能力の欠如、内発的動機づけの欠如という2要因のみ有意差が見られた。内的要因はイランの学習者にとって、無視できない要因である。

次に、東南アジアの動機減退要因の研究をあげる。Trang & Baldauf (2007) はベトナムの学習者を取り上げ、自由記述調査を実施し、動機減退要因を内的要因と外的要因に分類した。内的要因は英語への態度、失敗経験と成功経験の欠如、自尊であり、外的要因は教師関連要因、学習環境関連要因、その他という3カテゴリーである。動機減退を克服するための重要な要素は成功への期待であることが指摘された。

東アジアの学習者を対象とした研究としては、日本、韓国、中国の英語学習者を対象とした研究がある。まず、日本の英語学習者を対象とした研究をあげる。Kikuchi & Sakai (2009) は、日本の大学英語学習者を対象にアンケート調査と因子分析を行った結果、教科書、不十分な教室施設、テストの得点、コミュニケーションでない教授法、教員の能力や指導スタイルという5因子が抽出された。荒井 (2004) では、都内私立大学における、比較的英語レベルが高く、外国語学習にある程度成功したと考えられる日本人大学生33人を対象に自由記述調査を行った結果、学習者のやる気を失わせた要因として、教師、授業、クラスの雰囲気、その他の4カテゴリーが抽出された。そして、教師が生徒に対する接し方、人柄、教え方、語学レベルによる教師に関する要因がもっとも多いと指摘した。英語学習者の動機減退を韓国と中国で比較した研究もある。Li & Zhou (2013) は、韓国と中国のEFL英語学習者の動機減退要因を比較するために、質問紙調査を行った結果、自信の喪失、教師、内的動機減退要因は両国で共通しているが、中国の学習者では目標言語や文化に対する消極的な態度、学習ストラテジーの欠如が独特の要因になり、周りからのプレッシャーは韓国にのみ見られた要因であると述べている。国の文化の差異が動機減退要因に現れている。

中国の日本語学習者の動機減退について調べた研究では、高 (2016) と楊 (2016) がある。楊 (2016) は、重慶市、成都市、寧波市にある3大学で、質問紙調査を行った。その結果、教師の能力と教授法の不足、自己効力感の低下、学習動機の欠如、外部環境の悪さ、学習能力の低下、学習内容が簡単すぎるという6因子が抽出され、内部要因は外部要因より影響が強いと指摘した。高 (2016) は、ある大学の日本語学習者216名を対象に、動機減退について、質問紙調査を行った結果、学習ストラテジーの失敗、教材とカリキュラムの欠如、教師の職業技能の不足、内的興味の喪失、外的サポートの不足という5因子が抽出され、外部要因は内部要因より影響が強いという結論に至った。以上のように、動機減退要因の構造に注目した研究では、教師、興味と動機という2因子は概ね一致しているが、外部要因と内部要因どちらの影響がより強いかに関しては、結論は異なる。

次に、動機減退要因と熟達度との関係についての研究を見ていく。Hu (2011) は台湾のEFL学習者467名を対象に、動機減退要因と学習熟達度の関係を探索した。学習熟達度と関連のある最大の動機減退要因は言語学習困難であると指摘し、具体的には、最も関連のある項目は単語量の不足であるとした。また、2番目に関連のある要因は言語学習不安であり、学習不安をどのように軽減するかが教師の課題であると主張した。同様に、Falout & Maruyama (2004) は日本人の大学生164名を対象に、英語学習の動機減退要因と学習熟達度の関連について検討した。調査では、日本の事情に合わせ、Dörnyei (2005) で抽出された9つの要因のうちの6つを使用し、質問紙を作成した。採用された要因は、教師、自信の喪失、第二言語に対する消極的な態度、第二言語コミュニティに対する消極的な態度、グループ構成員の態度、教材と教科書である。第二言語コミュニティに対する消極的な態度以外は低熟達度グループの動機減退要因となった。高熟達度グループにとっては、自信の

喪失のみが動機減退要因であり、高熟達度グループは低熟達度グループより教師からの影響が強いと指摘された。

以上のように、動機減退要因に関しては、異なる国や異なる対象者への調査において、異なる要因が抽出された。要因は内的要因と外的要因に分類されることが多い。以上の研究から、一般的によく見られる外的要因は、教師、教材と教科書、学校の不十分な設備、学習環境などであり、内的要因は自信の喪失、学習能力の欠如、内発的動機づけの欠如などである。また、動機減退要因と熟達度の関係を見た研究では、言語学習困難と学習不安は台湾の学習者の熟達度への影響要因であり、熟達度によって、動機減退要因も異なることが挙げられた。台湾と日本の学習者の例のみであるが、動機減退と熟達度と関連があるといえる。

また、先行研究には、国の文化が動機減退要因に現れるという指摘があった (Li & Zhou 2013)。つまり、国別、地域別、文化圏別における動機減退要因の比較が可能である。国と地域の中にも、経済的・教育的な格差が存在している事実を踏まえ、さらなる教育的示唆を得るためには、地域格差という視点から学習者の動機減退の現状をより明らかにする研究が必要である。

3 出身地の動機づけへの影響の可能性

教育の地域格差は世界各国では普遍的に存在している現象だと考えられる。例えば、住岡 (2007) は、日本の教育格差は、「地域間格差」と「地域内格差」、「見える格差」と「見えない格差」、「学校教育における格差」と「社会教育における格差」といった三つの格差レベルにおいて現れると述べている。志水 (2009) は、日本の小学校での調査で、調査対象校の所在地を「大都市圏」「市部」「町村部」に分類し、学力の地域格差の存在を指摘した。

本研究では、住岡 (2007) を参照し、地域格差を「地域間格差」と「地域内格差」に分類した。「地域間格差」は中国の各県を単位とする地域であり、「地域内格差」は中国の各県の農村部と都市部に分ける2地域であると定義する。

中国では、地域格差を考慮した言語学習者の出身地と学習積極性の関連を述べた研究が数多くある。賀・常 (2012) は、中国の大学院生1,562名を対象に調査を行い、彼らの英語学習に影響する要因として、出身地、両親の教育レベル、学習動機、指導教員のサポートなどがあることを示した。この研究では、「地域内格差」に注目し、出身地は農村の方が、英語活動への参加積極性が高く、農村と中等規模都市出身の学習者の英語学習積極性や学校への期待は、都市の学習者より高い。また、中等規模都市出身の学習者は、都市出身の学習者より英語によるコミュニケーションが積極的であると述べている。張 (2014) は、上海市の6大学で行った大規模の調査の結果、27.3%の地方出身者は毎回予習するが、上海市出身者は18.7%のみである。授業で発言の機会を希望する地方出身者は17.2%だが、上海市出身者は9.7%であ

る。すなわち、出身地の「地域間格差」によって、学習者の学習積極性は異なり、地方出身者の学習積極性は上海市出身者よりは高い。以上の研究から、中国において、学習者の学習積極性と出身地はある程度関連していると示唆された。そのため、出身地は学習者の動機減退とも関連がありうると考えられる。

4 研究目的

本研究では、学校所在地の「地域間格差」のみならず、学習者の出身地の「地域間格差」と「地域内格差」も視野に入れるという独自の視点から、出身地と動機減退の関連について、研究を進めたい。そこで、以下の2点を目的とする。

目的1：中国における日本語専攻学習者の出身地と動機減退は関連があるかを確かめる。

目的2：大学の所在地、学習者の出身地と動機減退要因の関連を分析する。

5 本研究における出身地の定義

中国では、学習者の出身地の「地域間格差」と「地域内格差」を反映するのは、出身県と戸籍所在地である。そのため、本研究における「出身地」には出身県と戸籍所在地という2側面を含む。

出身県とは、学習者の生まれ育った、大学入学試験を受けた県である。中国では、6月に実施される全国統一入試で、受験生は本籍のある地域で受験（事情により別の地域で受ける場合もあるが、出願の原則として本籍地を通じて行う）する。各大学の各専攻の募集人数は、各省の人数、大学所在地、専攻の特殊性などを鑑みて、省ごとに配分されており、受験生はその振り分けられた枠をめぐって、省内の別の受験生と争うことになる（楠山2005）。しかし、中国では大学教育資源配布の不均衡性という問題点があり、地域及び農村と都市の間には、地域の経済発展レベルによって、教育の予算・教師の水準・進学率に、巨大な格差が存在している（東・鄧2011）。上海市と北京などは教育発展水準が高く、進学率も高い。そのため、統一入試の可否における不公平現象が存在している（東・鄧2011）。このような県間の経済と教育発展の格差、及び、入学試験の不公平性を反映できる学習者の出身県を基準にし、出身地と動機減退との関係を探索することができると考えられる。

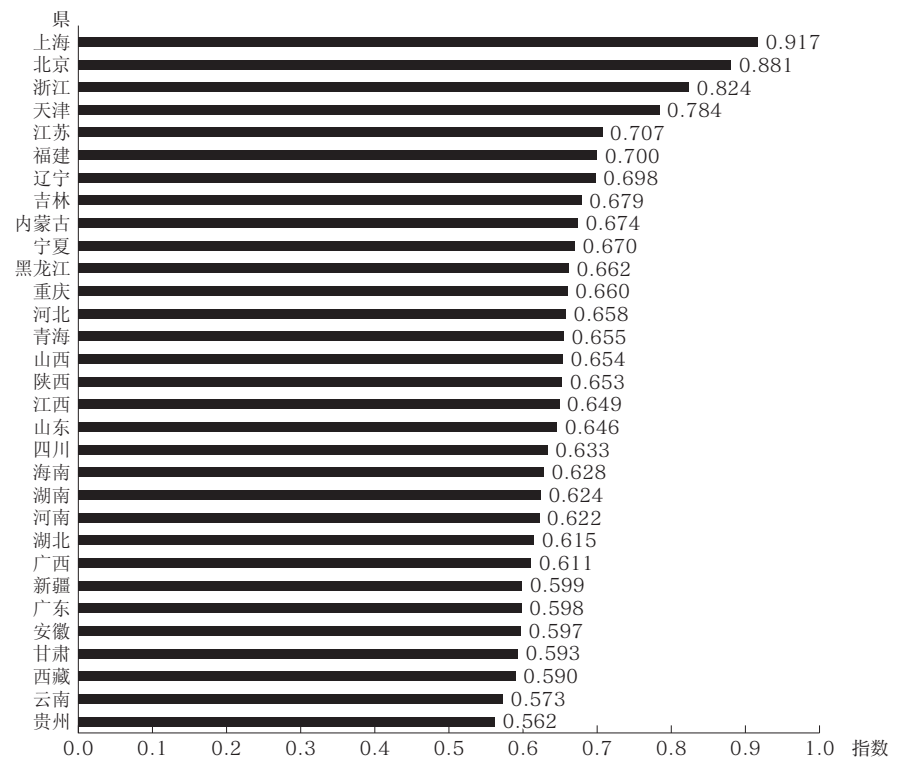
また、中国は農村・都市の二元構造である。それは二元戸籍制度を核心とし、二元教育制度、二元公共事業投入制度などを含むお互いに関連のある社会制

度体系である（褚2009）ため、核心となる戸籍所在地は「地域内格差」を測る基準と考えることができる。

6 出身地の県間比較の比較基準

本研究では、図1の2009年各県の教育発展水準の総合ランキング（王・袁・田・張2013）を県間比較の基準とする。

■ 図1 2009年各県の教育発展水準の総合ランキング（王・袁・田・張2013）



教育発展指数は、教育機会指数、教育投入指数、教育公平指数という三つの下位指標からなる。経済発展水準、人口などは教育機会水準に影響し、農村と都市の経済発展差異と県内財政分権化は教育公平水準に影響している（王・袁・田・張2013）。このように、各県の教育発展と経済発展水準は関係していると考えられる。このランキングや指標は各県の教育発展水準を反映し、ある程度各県の経済発展水準も反映できるため、学習者出身地の県間比較の基準として使用することは妥当で、信頼できると考えられる。

7 研究方法と結果

7.1 研究1

研究1では、半構造化インタビューにより、データを収集した。インタビューは2014年7月から12月に、9名の学習者を対象に、中国語で個別にインターネットを介して、1人に1回、40分から80分程度行い、録音した。インタビューの内容は日本語学習歴、言語学習経験、学習動機、学習目標、動機づけの変化と理由などである。調査対象者の基本情報に表1に示す。

表1 調査対象者の基本情報

学習者	性別	卒業時期	インタビュー時間	出身地	大学所在地	出身地が動機減退の要因になるか
A	男	2014年6月	2014年7月	河南省	上海市	○
B	女	2013年6月	2014年8月	安徽省	上海市	×
C	女	2014年6月	2014年9月	上海市	上海市	○
D	女	2013年6月	2014年8月	四川省	上海市	×
E	男	2015年6月	2014年10月	上海市	上海市	○
F	男	2014年6月	2014年10月	天津市	四川省	×
G	男	2015年6月	2014年8月	上海市	上海市	×
H	女	2013年6月	2014年8月	甘肅省	甘肅省	×
I	女	2015年6月	2014年10月	上海市	上海市	×

質的調査の結果、出身地は地方の大学に在籍していた学習者の動機減退要因には見られず、上海の某大学に在籍していた7名の学習者の中では、3名の動機減退要因となった。インタビューのデータの分析から、動機が減退した理由は「出身地から生じる劣等感」と「出身地から生じる優越感」という2つの視点から解釈できる。

7.1.1 「出身地から生じる劣等感」

「地域格差から生じる劣等感」という動機減退要因が抽出された学習者Aは、河南省出身で、上海の某大学に在籍していた。この学習者は発展がやや遅れている河南省から上海の大学に入学し、農村部から来た自分は何でもほかの学習者に及ばず、コンプレックスを感じた。そのことが日本語学習の動機づけに悪影響を与えたようである。

インタビューでは、学習による以下のような発言がある。

A1：私は農村から来た。他の人と比べたら、差を感じた。他の人より下手だ。すごく自分に対してマイナス思考だと思っている。試験を控えて、これまで勉強してきたのに、何もできていなかった。この現実をなかなか受け入れられなかった。日本語は、最初は文法と単語を学んだ。最初は、

単語は私にとって難しかったが、もっと悩んだのが文法だった。形式だけだったが、理解できなかった。

学習者Aは農村出身で、他人と比較されて、差を感じたと述べている。具体的には「他の人」は、誰かは明確に説明されなかったが、都市出身の学習者と教育発展レベルの高い地域出身の学習者という2つの可能性がある。学習者は「他の人」との出身地の差から、劣等感があると感じた。また、日本語学習困難を感じ、そのことが動機減退に繋がった。

7.1.2 出身地から生じる優越感

「出身地から生じる優越感」という動機減退要因が抽出された学習者C、Eの2名は、上海出身で、上海の某大学に在籍していた。インタビューでは以下のような発言があった。

C1：上海出身の人はなんかみんな怠け者だと思う、正直に言えば。

C2：(上海出身のため) 生活からのプレッシャーがないからだ。だから、やる気もあんまりない。

C3：自分の興味で専門を選ぶにもわがままだと思われるかもしれないが、お金持ちというわけではないが、生活の基本的なもの、例えば、家賃、食事代などはいらない。基本の給料でも生活できるため、あんまり学習にやる気がない。私たちも別の都市に行きたくない。

E1：Q：自分が怠け者ということは地域と関係があると思いますか。ある上海の学習者にインタビューしたら、上海の人は別のところの人より怠けると言いましたが、Eさんはどう思いますか？

A：私もそう思っている。

Q：そう思っているの？

A：別の県の人上海の学校に来るのが難しいからさ、上海の人にとって、別の県の大学に行くことは簡単だよ。

(Qは調査者、Aは学習者)

「出身地から生じる優越感」を感じた2名の学習者は、上海市出身で、上海市の大学に在籍していた。二人とも、地方出身者と比べ上海市出身の方が学習意欲は低いと述べた。その理由は、学習者Cは、児童期から良い教育環境に恵まれ、農村部の学習者より自信を持ち、今後の生活に悩んでいないため、真面目に勉強しなくてもいいという考え方を持っていたためである。また、学習者Eは、上海出身の学習者は、大学入学試験は地方出身者より受かりやすく、家庭と社会の教育環境の影響があるため、学習目標が欠如し、自分は別の県の学習者より怠けていると述べた。つまり、学習者はC、Eは自分の出身地に優越感を持ち、この優越感は学習者の動機減退に繋がったことが窺えた。

以上のように、中国において、出身地は動機づけに影響を与える可能性があり、中国の独特な動機減退要因であると考えられる。

7.2 研究2

7.2.1 質問紙の作成と予備調査

本研究では、量的データを収集するために質問紙を作成した。質問紙はフェイス項目と質問項目からなる。フェイス項目は、学年、性別、戸籍所在地、出身県、動機づけ強度の自己評価など学習者の個人情報に問う項目である。研究1のインタビュー調査のデータにより、35個質問項目を抽出した。

本調査の前に、2016年5月に、甘粛省の某大学で、日本語を専攻としている大学生36名を対象に、リッカート尺度の6段階評価（1：全く当てはまらない～6：よく当てはまる）を使用し、予備調査を実施した。SPSSを用いて分析した結果、質問項目の α 係数は0.879で、信頼性が高いと判断された。天井項目は見られず、床項目は8個あった。床項目を削除、修正、細分化し、Sakai & Kikuchi（2009）を参照し、37個の質問項目を作成した。37個の質問項目の内訳は学習動機3項目、言語学習困難7項目、言語の運用と成果5項目、学校と社会環境5項目、教師5項目、内発的動機づけの欠如5項目、学習能力の欠如と心理的要因5項目、進路2項目である。

7.2.2 本調査

教育発展レベルの異なる地域の間で比較を行うために、教育発展水準の高レベルの上海市と中間レベルの湖南省で、それぞれ質問紙調査を実施した。

2016年9月、上海市の某大学で、上級日本語授業の担当教員に依頼し、授業時間内に、質問紙を配布し、回答を求めた。質問紙を130部配布し、130部回収した。回収率は100%である。記入漏れの質問紙を除外した結果、有効な回答は128部であった。

2017年4月、湖南省の某大学の教師に依頼し、授業時間内に質問紙を配布

■表2 調査対象者の基本情報

	調査対象校	上海市 某大学	湖南省 某大学
	有効な質問紙数	128	91
学年	1年生	0	23
	2年生	1	13
	3年生	61	33
	4年生	66	22
出身県	大学所在地より教育発展指数の高い県出身	0	52
	大学所在県出身	70	6
	大学所在地より教育発展指数の低い県出身	53	33
	不明	5	0
戸籍所在地	農村戸籍	24	45
	都市戸籍	101	39
	不明	3	7

し、回答を求めた。質問紙を100部配布し、100部回収した。回収率は100%であり、有効な回答は91部である。調査対象者の基本情報を表2に示す。

得られたデータはSPSSを用いて分析した。2群の比較には、独立したサンプルの*t*検定を使用し、3群の比較には分散分析を使用した。 $p < .005$ で、群間に有意差があると判断した。

8 調査結果

8.1 上海市の大学における県間比較

県間比較のグループ分けは2009年教育発展指数（王・袁・田・張2013）を参照した。上海市の教育発展水準は全国1位であるため、学習者を上海市出身群と上海以外出身群という2群に分類した。上海市出身者は70名、上海以外出身者は53名である。動機減退の項目を*t*検定で分析したところ、結果は表3のようになった。

上海市の大学の県間比較では、上海出身と上海以外出身の学習者の間に、6項目に有意差が見られた。それぞれは、「授業のテンポが速い」「知らない知識の積み重ねについていけない」「自分が期待していた成績が取れなかった」「日本語学習への自信がない」「地域差から生じる劣等感がある」「日本語の学習方法がわからない」である。

■表3 上海市の大学における動機減退要因の県間比較

	全体 (N = 123)		上海 (N = 70)		上海以外 (N = 53)		<i>t</i> 値	<i>p</i>
	M	SD	M	SD	M	SD		
授業のテンポが速い	2.96	1.473	2.61	1.407	3.42	1.447	-3.088**	.002
知らない知識の積み重ねについていけない	3.47	1.661	3.07	1.653	4.00	1.532	-3.183**	.002
自分が期待していた成績が取れなかった	3.50	1.601	3.07	1.747	4.06	1.183	-3.535***	.000
日本語学習への自信がない	3.09	1.699	2.69	1.575	3.62	1.723	-3.137**	.002
地域差から生じる劣等感がある	1.57	1.056	1.24	.711	2.00	1.271	-4.195***	.000
日本語の学習方法がわからない	3.61	1.768	3.13	1.752	4.25	1.592	-3.639***	.000

** $p < .005$ *** $p < .001$

「地域差から生じる劣等感がある」の平均値は高くはなく、上海以外出身者は2.00である一方、上海市出身者は1.24のみであるため、動機減退との関連は弱いと言える。しかし、両者間には、有意差が見られたことに留意すべきであろう。

「授業のテンポが速い」「知らない知識の積み重ねについていけない」は言語学習困難に関する項目である。特に、「知らない知識の積み重ねについていけない」の平均値は高く、学習者全体との動機減退の関連が強いと言える。

上海以外出身の学習者は授業のテンポや知識の積み重ねにより動機が減退した可能性が高い。

「自分が期待していた成績が取れなかった」は有意差のある6項目の中で、最も平均値が高い。出身県を問わず、成績への期待と動機減退と緊密な関連が予想できる。その中で、4.06の平均値を持つ上海以外出身の学習者は、より成績を重視する傾向があるのではないかと考えられる。

「日本語学習への自信がない」と「日本語の学習方法がわからない」は学習能力の欠如と心理的要因である。両方とも上海以外出身者の平均値が高く、上海以外出身者との関連がより強いと言える。

8.2 上海市の大学における戸籍間比較

学習者の戸籍所在地を基準に、上海市の学習者を農村出身群と都市出身群の2群に分けた。分析対象となった学習者は125名であり、都市出身者は101名、農村出身者は24名である。*t*検定の結果を表4に示す。

■表4 上海市の大学における動機減退要因の戸籍間比較

	全体 (N=125)		都市 (N=101)		農村 (N=24)		<i>t</i> 値	<i>p</i>
	M	SD	M	SD	M	SD		
学校で勉強した知識が運用できない	3.17	1.575	2.94	1.515	4.13	1.484	3.455**	.001

** $p < .005$

上海市の大学における動機減退要因の戸籍間比較では、言語の運用と成果である「学校で勉強した知識が運用できない」に有意差が見られた。この項目の全体の平均値は3.17であり、農村出身者の4.13は都市出身者の2.94を大きく上回る。農村出身の学習者にとって、知識が運用できないことは動機減退を導きやすいと言える。これは、農村出身者がより知識を運用する意欲が高い、また、現状的には都市出身の学習者ほど運用できていないという可能性があるのではないかと考えられる。

8.3 湖南省の大学における県間比較

2009年教育発展指数を参考にし、教育発展指数が湖南省より高い県出身の学習者を教育高レベル群、湖南省出身の学習者を湖南省群、教育発展指数が湖南省より低い県出身の学習者を教育低レベル群と定義する。分散分析をした結果、有意差のある項目はなかった。

8.4 湖南省の大学における戸籍間比較

湖南省の某大学に在籍している学習者の戸籍所在地を基準に、学習者を農村出身群と都市出身群という2群に分けた。分析対象となった学習者は84名であり、都市出身者は39名、農村出身者は45名である。*t*検定の結果を表5に示す。

■表5 湖南省の大学における動機減退要因の戸籍間比較

	全体 (N = 84)		都市 (N = 39)		農村 (N = 45)		t値	p
	M	SD	M	SD	M	SD		
自分が期待していた成績が取れなかった	3.49	1.375	3.03	1.478	3.89	1.153	3.005**	.004
クラスメートとの関係が良くない	1.52	.814	1.26	.498	1.76	.957	3.053**	.003

** $p < .005$

湖南省の大学における戸籍間比較では、言語の運用と成果の「自分が期待していた成績が取れなかった」と学校と社会環境の「クラスメートとの関係が良くない」の2項目に、有意差が見られた。

「自分が期待していた成績が取れなかった」という項目に関しては、農村出身群の平均値は3.89、都市出身群は3.03である。農村出身者は都市出身者より、成績への期待と動機減退との関連が強いと言える。蔣（2010）では、日本語専攻学習者への調査から、試験競争動機は学習者の最も強い動機になると指摘されている。しかし、試験競争動機を持つ学習者にとって、個人の期待が満たされない場合は、動機減退の一要因にもなりうる。

「クラスメートとの関係が良くない」に関しては、平均値は高くないため、動機減退との関連は弱いと言える。しかし、有意差が見られたとは、農村の学習者の方が人間関係に悩んでいることであり、都市出身の学習者より動機減退に繋がる可能性は有意に高い。

9 総合考察

9.1 インタビュー調査に関する考察

インタビュー調査の結果から、出身地は日本語専攻学習者の動機減退を導く可能性があると考えられる。インタビュー対象者の出身地から分析すると、上海の大学に在籍する上海以外出身の学習者は出身地から劣等感を感じる可能性があり、上海出身の学習者は優越感を感じる可能性がある。それぞれは学習への動機減退を導く。

本研究は、先行研究で指摘された多くの上海以外の出身の学習者（張2014）、農村出身の学習者（賀・常2012）が、比較的高い学習積極性があるという結論を否定しない。しかし、上海以外の出身と農村出身の学習者は全員が高い学習動機を持つとは限らず、出身地は動機減退の一つの要因として働く可能性があることが本研究で示唆された。

9.2 質問紙調査に関する考察

質問紙調査の分析結果から、本研究では以下のような結論が得られると考えられる。

まず、大学所在地の教育発展指数により、学習者の出身地と動機減退要因の関連の度合と内容は異なる。本研究では、教育発展指数の最も高い上海市と中間程度の湖南省という2県を取り上げ、調査を行った。上海市での調査では、*t*検定による有意差のある項目は湖南省より多く、出身地と動機減退の関連は上海市ではより強い。

第二に、上海市の大学では、出身地の県間差異は戸籍間差異より動機減退との関連が強い。一方、湖南省の大学では、戸籍間差異は県間差異より動機減退との関連が強く見える。

第三に、県間差異に関しては、上海市の大学に在籍する学習者は湖南省の大学に在籍する学習者より、動機減退との関連が強い。その反面、戸籍間差異に関しては、湖南省の大学に在籍する学習者は、上海市の大学に在籍する学習者より動機減退との関連が強い。

9.2.1 県間比較に関する考察

県間比較に関しては、上海の大学にのみ有意差が見られた。

学校と社会環境に関する項目「地域差から生じる劣等感がある」に有意差が現れた。一般的には、学習者の劣等感への影響要因は環境の変化、家庭出身、挫折、性別、心理要因など多くの側面がある（陈2006）。上海以外の出身者、特に、教育発展指数の低い地域の学習者は教育発展指数が1位の上海市に進学し、出身県から上海市への環境の変化から、劣等感を感じた可能性が高い。一方、湖南省の教育発展レベルは中国の中間レベルにあり、学習者の出身県と湖南省の間に、上海市ほど激しい環境の変化はなく、比較的劣等感が生じにくいと考えられる。

「授業のテンポが速い」「知らない知識の積み重ねでついていけない」という学習困難に関する項目、「自分が期待していた成績が取れなかった」という言語の運用と成果に関する項目、「日本語学習への自信がない」と「日本語の学習方法がわからない」という学習能力の欠如と心理的要因に関する項目は全て上海の大学の調査にのみ見られた有意差のある項目である。これらの項目はすべて上海以外出身者の平均値が高く、上海以外出身者は学習環境への十分な適応や心理的な準備ができていないことが窺えた。これらの学習者にとって、上海への進学は新環境への適応能力が求められると考えられる。

9.2.2 戸籍間比較に関する考察

戸籍間比較は、上海市と湖南省ともに有意差が現れたが、具体的な内容は異なる。

上海市での調査では、「学校で勉強した知識が運用できない」という質問項目で戸籍間に有意差が見られた。農村出身の学習者はより知識の運用に困難があると感じている。賀・常（2012）は、出身地が農村の方が、英語活動への参加積極性が高いと指摘した。日本語活動も同様に、参加積極性の高い農村学習者が日本語でうまく接触できない時、動機が減退しやすいのではないかと推測される。

湖南省の戸籍間比較では、「自分が期待していた成績が取れなかった」に有意差が現れた。農村戸籍の学習者の方が、成績が達成できるかどうかの動

機減退に与える影響は強い。すなわち、農村出身の学習者の方がより成績を重視する傾向が見られた。

また、「クラスメートとの関係が良くない」という学校と社会環境に関する要因も抽出された。全体的な平均値は高くはないが、農村出身の学習者がより学習環境との関わりに困難を感じる事が予想できる。

10 教育的示唆

10.1 教師による出身地の動機減退への影響の意識化の必要性

出身地が学習者の動機減退に関連があることを、教師が意識することが望まれる。出身地の動機減退への影響は、優越感と劣等感から、日本語学習に影響し、動機減退を導く。特に、上海の大学での質問紙調査では、「地域差から生じる劣等感」は出身地の戸籍間比較ではなく、県間比較で有意差が見られた。また、県間比較から見られた有意差のある項目数は戸籍間比較より多い。戸籍間差異と共に、県間差異の動機減退への影響を教師が意識する必要があると考えられる。

10.2 地方出身者の環境適応へのサポート

上海以外出身者を環境適応させるために、学習困難の克服へのサポートが重要である。上海の大学における調査では、県間比較で、日本語学習困難に関する項目に有意差が見られた。学習困難は、上海以外出身の学習者の動機減退とより強い関連があることを明らかにした。出身県と大学所在地の教育発展の格差により、上海以外出身者の学習環境適応が問題になると推測される。学習方法を見つけさせる、授業のテンポと理解状況を確認するという2つの側面から、日本語学習過程への介入が有効であろう。

李（2006）は、中国の大学生の学習態度、学習方法、心理要素など環境適応の諸指標に関しては、農村出身の学習者の方が高く、戸籍間に有意差が見られ、農村出身の学習者の環境適応能力はより高いと指摘した。本研究の結果によると、教育発展指数の高い上海に在籍する日本語専攻学習者の環境適応力は李（2006）で述べられた出身地の戸籍間の差異ではなく、県間差異によって左右されるということに注目すべきであろう。

10.3 農村・都市出身によるビリーフの異なりへの注目

岡崎・清水・小山（2000）の中国人日本語専攻学習者を対象とするビリーフ調査では、南北の学生グループ間で、「日本語の有用性」を感じている学生は北方の方が多いと述べている。すなわち、中国の南北の間に、学習者のビリーフに差がある。

本研究では、上海某大学の戸籍間比較では、知識運用の困難さは、農村戸籍の学習者の動機減退とより関連していることが分かった。また、湖南省の

大学では、農村出身の学習者が試験への達成志向が強いことを明らかにした。すなわち、地域間における学習者のビリーフの差のみならず、地域内における都市と農村の間に、学習者が持つ試験や知識の運用に対するビリーフが異なると推測される。

そのため、上海における農村出身の学習者に日本語の運用機会を提供し、日本語の運用と関係のある課外活動への参加を促すことは有効であろう。湖南省における農村出身の学習者に対しては、実際の日本語能力、知識の使用などに力を注いで行けるようにすることが重要であると考えられる。

11 本研究の限界と今後の課題

本研究では、学習者の出身地と動機減退要因との関連を、質的・量的調査を通じて、検討した。しかし、本研究では、調査は湖南省と上海市の各1大学で実施したが、同じ県でも数多くの大学があるため、その県全体に広げた結論や分析ができなかった。また、サンプルとしては、2県のみと比較になるため、結論もこの2県の調査結果の分析に限られる。出身地と県の関係について、他の県ではどのようなようになるかは判断が難しい。

今後は、対象者を増やし、調査対象県を広げ、出身地の相違によって、動機減退要因の因子構造はいかなるものか、どのような相違があるかを課題にしたい。

■付録（37個の質問項目）

日本語学習動機（3）	進路（2）
専攻を真面目に選択しなかった 日本語専攻に振り分けられた 専攻を選択するときに選択肢は少なかった	自分の意思で進路を選択できない 日本語と関係のない仕事を探すつもりだ
学習能力の欠如と心理的要因（5）	学校と社会環境（5）
日本語学習への自信がない 日本語の学習は苦しいと予想できなかった 自分は日本語学習の才能がない 日本語能力に関する目標がない 日本語学習の方法がわからない	クラスメートとの関係がよくない 地域差から生じる劣等感がある 地域差から生じる優越感がある 教師との距離が遠い 自分の友達も日本語学習意欲がそれほど高くはない
言語の運用と成果（5）	教師（5）
勉強しても効果がない 達成感が感じられない 自分が期待していた成績が取れなかった 日本語の資格だけが欲しい（JLPTなど） 学校で勉強した知識が運用できない	教師が怒りやすい 教師の日本語知識の説明がわかりにくい 教師の教え方が受け入れられない 教師が学生にいじわるをする 評価基準について、教師が学生を不公平に扱う
言語学習困難（7）	内発的動機づけの欠如（5）
学習内容が多すぎる 授業のテンポが遅い 教材の内容は生活から遠い 知らない知識の積み重ねでついていけない 単語や文章を覚えるには困難を感じた 文法の使い分けや敬語が嫌い 学習が長く続かない	日本語学習以外のことで忙しい たくさん勉強しなくても、日本語でゲームやドラマなどを楽しむことには支障がない 教師に日本語の学習を強制されたくない 日本語に興味がなくなった 自分は怠け者だ

謝辞

本論文は2016年日本語教育国際研究大会ポスター発表した「地域格差は中国における日本語を専攻とする学習者の動機減退要因になりうるか——学習者へのインタビューから——」を基にしています。本論文執筆にあたり、終始多くのご指導を賜りました小林由子先生に深く感謝申し上げます。また、調査に協力くださった教員と学生の皆様に心より感謝いたします。さらに、貴重なご指摘とご助言をくださった査読者の方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 荒井貴和 (2004) 「何が外国語学習者のやる気を失わせるか——動機減退の原因とそれに対する学習者の反応に関する質的調査」『東洋学園大学紀要』12, pp.39-47.
- 阿川敏恵・植田麻実 (2013) How Japanese students perceive demotivation toward English study and overcome such feelings. *JACET Journal* 56, pp. 1-18.
- 陈冬云 (2006) 「大学生自卑心理探析」『山西科技』1, pp.76-77.
- 褚宏启 (2009) 「城乡教育一体化：体系重构与制度创新——中国教育二元结构及其破解」『教育研究』11, pp.3-10.
- 東曉・鄧紅 (2011) 「中国の大学入試制度の問題点とその改善策」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』48, pp.91-100.
- Dörnyei, Z. (2005) *Teaching and researching Motivation*. Beijing: Foreign language teaching and research press.
- Falout, J., & Maruyama, M. (2004) A comparative study of proficiency and learner demotivation. *The Language Teacher* 28(8), pp.3-10.
- 高荣聪 (2016) 「日语专业大学生日语学习负动机影响因素研究」『科教文汇』25, pp.179-182.
- Ghadirzadeh, R., Hashtroudi, F. P., & Shokri, O. (2012) Demotivating factors for English language learning among university students. *Journal of Social Sciences* 8(2), pp.189-195.
- Hu, R. J. S. (2011) The relationship between demotivation and EFL learners' English language proficiency. *English Language Teaching* 4(4), pp.88-96.
- 贺新全・常桐善 (2012) 「影响硕士研究生英语学习因素的实证研究」『外语教学』3, pp.68-71.
- 磯田貴道 (2005) 「学習意欲や動機づけに関する概念の整理へ向けて」『広島外国語教育研究』8, pp.85-96.
- 蒋庆荣 (2010) 「日语学习动机实证研究」『淮海工学院学报：社会科学版』1, pp.4-7.
- Kikuchi, K., & Sakai, H. (2009) Japanese learners' demotivation to study English: A survey study. *JALT Journal* 31(2), pp. 183-204.
- 鹿毛雅治 (2013) 「第1章 学習意欲とは何か」『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』金子書房, pp.11-12.
- 倉八順子 (1992) 「日本語学習者の動機に関する調査——動機と文化的背景の関連」『日本語教育』77, pp.129-141.
- 国際交流基金 (2013) 『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より結果概要』
(http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2012/2012_s_excerpt_j.pdf)
(2018年1月4日検索)
- 国際交流基金 (2017) 『海外の日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査より』
(http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf) (2018年1月4日検索)
- 楠山研 (2005) 「中国における大学入試改革の動向：地方・大学への権限委譲に関する一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』51, pp.128-141.
- 郭俊海・大北葉子 (2001) 「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日

- 本語教育』110, pp.130-139.
- 李炳煌 (2006) 「大学生学习动机与学习适应关系研究」『煤炭高等教育』3, pp.105-107.
- Li, L., & Zhou, C. (2013) Different Faces of Demotivation: A Comparative Study on Chinese and Korean College EFL Learners' Demotivators. *Journal of Applied Sciences* 13(6), pp. 800-809.
- Meshkat, M., & Hassani, M. (2012) Demotivating factors in learning English: The case of Iran. *Procedia-Social and Behavioral Sciences* 31, pp. 745-749.
- 毛賀力・福田倫子 (2010) 「中国における日本語専攻大学生及び中国における中国語専攻学習者の動機づけの比較」『言語と文化』23, pp.209-232.
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩 (1995) 「大学生の日本語学習動機に関する国際調査——ニュージーランドの場合」『日本語教育』86, pp.162-172.
- 大西由美 (2011) 「目標達成見込みの高低と動機づけの関連：ウクライナにおける日本語専攻大学生の動機づけ調査」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』12, pp.21-40.
- 岡崎智己・清水百合・小山悟 (2000) 「中国における学習者と教師の日本語学習に対する意識の相違」『日本語教育方法研究会誌』7 (1), pp.2-3.
- Sakai, H., & Kikuchi, K. (2009) An analysis of demotivators in the EFL classroom. *System* 37(1), pp.57-59.
- 志水宏吉 (2009) 「学力の地域格差 (教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書) — (分析編)」『研究所報 (52) ベネッセコーポレーション』, pp.50-63.
- 住岡英毅 (2007) 「教育の地域格差に挑む (〈特集〉「格差」に挑む)」『教育社会学研究』80, pp.127-141.
- Trang, T. T. T., & Baldauf Jr, R. B. (2007) Demotivation: Understanding resistance to English language learning-the case of Vietnamese students. *The journal of Asia TEFL* 4(1), pp.79-105.
- 王善迈・袁连生・田志磊・张雪 (2013) 「我国各省份教育发展水平比较分析」『教育研究』6, pp.29-41.
- 楊孟勲 (2011) 「台湾における日本語学習者の動機づけと継続ストラテジー」『日本語教育』150, pp.116-129.
- Yo, Hamada., & Ben, Grafström. (2014) Demotivating factors in learning Japanese as a foreign language. 『秋田大学教養基礎教育研究年報』16, pp.9-18.
- 杨豪杰 (2016) 「日语专业大学生学习负动机原因探析」『浙江外国语学院学报』5, pp.21-26.
- 张丽梅 (2014) 「关于大学日语专业教育学情调查报告 以日语“学习意识”为中心」『东北亚外语研究』1, pp.27-32.

(平成29年12月6日受理、平成30年1月12日採択)